

氏名	齋 藤 竜 介
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	甲 第 2 9 9 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和44年 3 月31日
学 位 授 与 の 要 件	医学研究科外科系耳鼻咽喉科学専攻 (学位規則第 5 条第 1 項該当)
学 位 論 文 題 目	兎耳透明室装置による耳科手術用自家移植材料の検討
論 文 審 査 委 員	教授 高原 滋 夫 教授 田 中 早 苗 教授 砂 田 輝 武

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

鼓室成形術において、鼓膜再穿孔、皮弁真珠腫の発生、術後乳突腔に起因する障害および連鎖再建に用いられた人工材料の着床不全などの問題は現在なお十分に解決されてはいない。これらの問題を解決するため、生理的外耳道の保存、皮弁に代る鼓膜形成材料の追求、術後乳突創腔の閉鎖および生体組織による伝音連鎖の修復などが近年行われるようになってきた。

そこで、著者はWilliamsによる兎耳透明室装置 (steel chamber technique) を用いて、これらの操作にしばしば用いられる諸種自家移植組織 (静脈, 筋, 筋膜, 軟骨および骨組織) の移植実験を行い、生体内での移植材料としての特性について、若干の基礎的な検討を加えた。そして、次の結論を得た。

1. 移植組織を挿入しない透明室における組織新生の過程を観察し、移植実験における母床組織反応の対照実験とした。
2. 移植組織の吸収は母床組織の反腹する出血、吸収およびこれに続く母床血管の活発な侵入により行われる。
3. 自家静脈、筋膜組織は長期間生体内にとどまり、鼓膜形成材料として有用な組織であると考えられる。
4. 自家軟骨組織は生体内に極めて長く留まり、生着力が強く、耳小骨連鎖の修復その他の移植材

料として優れたものであると考えられる。

日本耳鼻咽喉科学会々報 第73巻第1号掲載予定

論文審査結果の要旨

本研究は、鼓室成形術操作に用いられる諸種自家組織（筋、筋膜、静脈、軟骨および骨組織）の移植実験を行ったものである。従来の固定染色標本にもとづく 究と異り、改良された兎耳透明室装置を用いることによって、同一移植組織を連続的に生体内で顕微鏡下に観察、追求したことおよび生体内における各組織間の生着、吸収過程の差を指適し、臨床上使用する際の基礎的資料を提供したものである。

よって本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。